

自ら学ぶ教職員 活動報告書

グループ名 みんなの☆職員室【Blue】

テーマ 学校の異なる教師チームによる Teams を用いたオンライン教育実践研究

取組のポイント・成果

【活動の概要】

みんなの☆職員室は、令和3年度に行われた、未来を創る学び共同研究に参加した教員有志がもとになって立ち上げた Microsoft Teams 上で、広く日々の教育実践を交流するグループです。現在は、令和4年度の共同研究に参加した教員有志にもメンバーを広げて活動しています。このメンバーの中から8名のコアメンバーでみんなの☆職員室【Blue】というグループで、特に探究に関係する、教育映画「夢見る小学校」の上映会と今現在我々が直面する AI と教育とのかかわりについて実際に AI を使用しながら深めていく取り組みを行っていくこととしました。

【夢見る小学校上映会】

岐阜県立大垣北高校の会議室をお借りして、オオタヴィン監督のドキュメンタリー映画「夢見る小学校」の上映会を行いました。上映会には、みんなの☆職員室のメンバーを中心に、10名の参加がありました。このドキュメンタリー映画は、探究学習を学校の中心に据えた私立・公立の小学校を扱っており、教育方法の多様性に着目しました。この映画の上映会が高等学校で行われ多くの高等学校教員がこの映画会を行うのは、非常に珍しいことであったようですが、高等学校の教員から見ても非常に参考になる部分の多い映画であったことが、参加者の感想から見えます。

感想のまとめ

主な感想

1.夢の実現へのアプローチ

生徒たちが単に職業名を挙げるのではなく、どのように夢を実現したいかを語るシーンが印象的であった。

2.教育の枠組みへの気づき

自分の知っている世界が、敷かれたレールの上の世界であることを知りました。何かしらの自分の行動の変容に繋がりたいです。

3.日本の教育の可能性

アメリカの「Most likely to succeed」同様に、日本の教育にも高い可能性を感じた。

4.生徒主体の学び

生徒たちが修学旅行の行き先を自ら考えるシーンや、卒業生が学校での経験を社会に還元したいと語るシーンが、感動的でもあり学びの主体性を示していた。

5.高校教員としての反応

この、映画を通じて自分の授業やクラス経営に新たな変化をもたらす可能性を感じ、生徒の大切な経験の時間を大切にすることの重要性に気づいた。

6.やさしさを感じる人間関係

女の子に男の子が一生懸命何かを伝えようとしているシーン、自分の語彙力が…と言っていたあの少年が、そのまま心やさしい大人に成長してくれるといいなあと思いました。

【AI の教育利用研究】

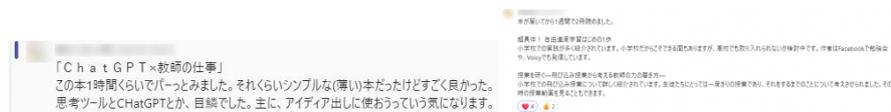
日々、みんなの☆職員室の Teams での活動を通じて、メンバー同士が情報交換しながら AI の教育利用に関する研究を進めています。主には、AI 技術の実践的な活用法を共有し、教育への応用可能性を探っています。具体的には、ChatGPT の有料プランである ChatGPT Plus を契約し、その機能を教育現場でどのように活用できるかを探求しました。私たちは、AI が学習支援や生徒の興味喚起にどのように貢献できるかを、具体的な事例を交えて分析しています。主なものを以下に Teams の実際の様子の画像と共にあげます。



文章(添削・作成・要約)、プログラミング、画像生成などには非常に強く、数学的な内容に関してはまだまだ実用が難しい段階であることが分かりました。また、全体的に作成したものは100%と考えることはできないので、教員にとってアシスタントとして利用していくことが有効であることが分かりました。

【書籍からの情報収集】

授業方法や、AI など、さまざまな分野の書籍を購入し、お互いのインプットを Teams 上で共有し学び合う活動を行った。



【様々な教育に関する話題についての情報交換】

みんなの☆職員室では、日々教育に関する話題が活発に交わされています。新しい教育技術の導入、教育政策の動向、教育現場での実践的な課題など、多岐にわたるテーマが討論されており、メンバー間での深い洞察や経験の共有が行われています。これらの議論は、教育現場での実践に直接的な影響を与え、教育の質の向上に貢献しています。

今後の課題

今後は、私たち教員の資質向上のために教師が協働し、いろいろな話題を共有する場所がやはり必要だと強く感じるので、私たちのみんなの☆職員室の様な健全なコミュニティをメンバーそれぞれが、各所で波及させていくことを課題と考えています。また、今回1年間探究とAIについて実際に見聞を広め、実際に手を動かしていくことで、それぞれの勤務先でそれぞれのメンバーがAIについて抵抗感なく自分のアイデアで使用するふるまいを通じて教育とAIの関係性を作っていくことが課題であると考えています。